

比率の解説

出生率、死亡率、婚姻率、離婚率：

$$\frac{\text{件数}}{\text{人口}} \times 1,000$$

死産率(自然死産率・人工死産率)：

$$\frac{\text{死産(自然・人工)数}}{\text{出生(出生+死産)数}} \times 1,000$$

乳児死亡率・新生児死亡率・早期新生児死亡率：

$$\frac{\text{乳児・新生児・早期新生児死亡数}}{\text{出生数}} \times 1,000$$

- 乳児死亡 : 生後1年未満の死亡をいう
新生児死亡 : 生後4週(28日)未満の死亡をいう
早期新生児死亡 : 生後1週(7日)未満の死亡をいう

周産期死亡率：

$$\frac{\text{妊娠満22週以後の死産数+早期新生児死亡数}}{\text{出産(出生+妊娠満22週以後の死産)数}} \times 1,000$$

(平成7年1月から変更)

合計特殊出生率：

$$\left\{ \frac{\text{母の年齢別出生数}}{\text{年齢別女子人口}} \right\} \text{ 15歳から49歳までの合計}$$

女子の年齢別出生率の合計で、1人の女子がその年次の年齢別出生率で一生の間に生むとしたときのこどもの数をあらわす。

死因別死亡率：

$$\frac{\text{死因別死亡数}}{\text{人口}} \times 100,000$$

年齢調整死亡率：

$$= \frac{\{[\text{観察集団の各年齢(年齢階級)の死亡率}] \times [\text{基準人口のその年齢(年齢階級)の人口}]\} \text{の各年齢(年齢階級)の総和}}{\text{基準人口の総和}}$$

年齢構成が著しく異なる人口集団の間での死亡率や、特定の年齢層に偏在する死因別死亡率などについて、その年齢構成の差を取り除いて比較する場合に用いる。これを標準化死亡率という場合もある。基準人口としては「昭和60年モデル人口」を用いている。

なお、観察集団の各年齢(年齢階級)の死亡率は、100,000倍されたものである。

また、死因別に観察をする場合は、通常、100,000倍にする。

標準化死亡比(SMR)：

$$= \frac{\text{観察集団の現実の死亡数}}{\left\{ \begin{array}{l} \text{(基準となる人口集団} \\ \text{の各年齢階級の死亡} \\ \text{率)} \end{array} \times \begin{array}{l} \text{(観察集団のその年齢階} \\ \text{級の人口)} \end{array} \right\} \text{の各年齢階級の総和}} \times 100$$

年齢構成の異なる集団間の死亡傾向を比較する指標
平成12年の全国死亡率を基準とした